

やまなし文学賞 青少年部門 青春賞

かたち 柳澤とこ葉 作

一拍おいてセミがなかった。

目を外にやると、夕日はビルの窓に反射して、この夏の暑さを助長していた。何もかも、静かに強い赤色へと染めていく夕日。一日が終わる悲しさを持つ夕日。尾根に沈んでいくこの夕日を、窓から見続けてしまう。

なぜ先ほどからこの景色を、私は眺めているのだろう。特段、この景色を見たいわけではないのに。しかし、心のどこかでその答えが分かっている気がする。気づかないフリをしているのだ。見ていると、無意識に時間が過ぎてしまったことにして。

私は今、クラスメイトの凜りんの家にいる。

本当はおばあちゃんにお菓飲ませる時間なのに。

凜の家に寄ったのは、行きたい、といつにも増して、揺るぎない思いが芽生えたからだった。いつもはぼうつと過ごしている自分が、だ。しかし、私にとっても彼女にとっても、互いにクラスメイトの一員というだけで、友達と言えるのかも分からない。

それなのに――

「直角三角形の三角比は1:2:√3。だから」

先生は文末に、チョークをカンッと鳴らし、句読点を打つ。セミの音が私の頭に残像を残し、眠さに拍車をかけたが、チョークの音でふと我に返る。黒板を見ると、直角三角形の横に走り書きされた数字の羅列は呪文のようで、高校一年生ながら受験の危機を早々に迎えている。

夏の暑さというと、節約中のクーラーでわずかに涼しくされている程度だ。勉強より、暑さとか一に悩まされる自分は、窓際で外を眺めるのが当たり前になってきている。外では行方不明者の背格好や服装を告げる市役所アナウンスが響いていた。ふつうなら耳から抜けていく内容だが、スウガクの呪文をかき消し、耳をそばだてる。それが、自分を悩ませていく。その人は私のおばあちゃんじゃない、家にいるはず、きつと、でも一って。生ぬるい夏の風から伝わったその音は、耳から入って脳内で滞る。心配、不安、恐怖なのか分からない。ずっと、頭の中でエコーが鳴り止まやまない。クラスにかかる電話もそうだ。どきつとして心臓に汗をかくような、変で嫌な気持ちになる。

私のおばあちゃんは認知症、なのだ。母は、夜勤のトラックドライバー。夜遅くまで働いてくれているから、一人で介護している。というか、するしかない。

世の中では、そのことに名前をつけているが、自分がその対象だつて誰にも思われたくないし、「形」で納得されたくない。

老人ホームに入ることも考えた。でもお試しで入ってみたら、人見知りなおばあちゃんはその環境で笑顔を見せなかった。おばあちゃんに嫌なことはさせたくない。だから結局、その道は断念することになった。自分ならおばあちゃんのお手伝いができる。笑顔にすることができる。そう思った。

でも、いつも笑顔にさせることはできなかった。家の外で子供たちが公園で笑っている声が響いていたとき、オムツを捨てる手を少し止めて、眺めていた。それにおばあちゃんは、気づいてしまった。「汚いじゃんね。ごめんね」

学校は楽しいはずで、青春だねえと目を細められがちだが、自分はその中には入らない。会話の中には入れないのと、時間を割けられないのが問題なのだろうか。皆みたいに。なれないのかな。

キーンコーンカーンコーン

スウガクの呪文以外のことをぐるぐると頭に浮かべていたら、四校時は終わっていた。

机をつけてわいわいとお弁当を食べる。そんなことはできないから、プール近くの小さい木陰に行く。風通しが良く、人がいない。

今日のお弁当は。

昨日か一昨日くらいなの、残り。

あったかいご飯はないけど、夏だし、ね。

どうつてことないくらいに小さいこと。そう理由をつけて、納得させる。そんな自分が気持ち悪い。そう思うと、自然と目線は水道に向かっていた。顔を洗って、何でもいいから流したい。

蛇口をひねると、高い音が鼓膜を振るわせ、ジャコツと水飛沫をあげながら、勢いよく水は流れた。顔にかかった水は、灼熱の暑さにやられた水道管のせいで、ぬるかった。期待とは違い、胸元のリボンと袖が濡れたくらいで、顔を洗う前と後の自分に変化はなかった。

「よー」

自分だけの空間に漂う静寂が、突如として破られた。目の前に現れたのは、凜だった。彼女は、一人しか入れないこの小さな木陰に土足で入ってきた。凜はクラスメイトの一人。それなのに急に私の心に、安心の手に負えない二文字が浮かんできた。

なにしてんの、と聞く凜に、お弁当、と単語で返す私。

ぎこちない。

袖濡れてるね、顔洗うと気持ちいい？ と空白を埋めたい凜は問うてくるが、ぬるい、と返すのもなんだかで、小さく頷いた。

会話するのが好きな凜は、質問で隙間を埋めようとする。

sinってさ、あれシンって最初読んじやったよね？ 先生のチョーク音ってクセ強いよね？ お弁当美味しい？

止まらない凜の質問に、一つ一つ答えるのが面倒で、うん、と全てに返した。

その瞬間

「さいき…今日さ、元気がさげね」

「うん」

あ。

空返事したことに後悔した。元気がないことを、自分で認めているように答えてしまった。認めるなんて、苦しいという「形」ができるようで、そうじゃないんだよ、って否定したい。この休み時間に、今まで頑張って避けてきた悩みの痛みを知った。それが増幅しそうで、地味に効いたクーラーのある教室にいればよかったのかもしれないと思う。

私は、何か言いたげな凜をおいて、教室に戻ってしまった。

頭に浮かんだ悩みが、行き場のない苦しみになる。凜が現れたことで、それが大きくなり、消えない。

どうしよう、どうしよう。興奮しても仕方がないのに、心拍数が上がるほど不安を助長させていく。

ざわめく気持ちとは裏腹に、上履きのゴムがリノリウムの廊下と摩擦してキュリツと、高い音を出す。気持ちと高音が噛み合わない。そんな些細なことも、何故か平穏でいられない。頭に上った血が眉間まで熱さを伝達させる。

思いを振り払うように頭を掻くと、髪の毛が引っかかって通らない。

先がわからないこの苦しみを、どうにかする勇氣なんて、自分にはない。

自分は現状を変えられないから、いつものように鎮めよう、この処理できない気持ちを。どうにもならないし、しようともしない。それでいい。

それなのに、生起した感情が諦めに、抗おうとする。

クラスに戻ると、みんなはわいわいとしている。これがザ・青春か。自分ばかりうじて残った教室の隅でさえ、居心地の良さを感じられない。それが自分の日常がうまくいかないことを浮き彫りにした。

おばあちゃんのが好きなのに、よくはならない認知症と、消えていく自分だけの時間が比例する。そんなことを考えてしまうのがおばあちゃんに申し訳ないが、自分の時間がなくなるのが怖くなった。今を変えないといけないのだろうか。凜との会話から膨れ上がった感情は、違う感情へと変換される。

私と時間差で教室に戻ってきた凜が席に座った。どうやらお弁当の食べ途中だったようで、赤いバンダナが机の上に開いたままだった。私も食べきってはないが、もう胃に入りそうにもない。だから残り、というか残りの残りは家に持ち帰ることにした。

そして、私の斜め前方に席がある凜を、いつのまにか強く見つめていた。お昼の時は自分から戻ってしまったが、この感情の正しい対処の仕方は、彼女に教えてもらいたいと思った。

凜はまるで、頭の後ろに目があるかのように自分の目線に気づき、なんで先に帰ったの、と言わんばかりのぬすつとした顔で、ゆっくりこちらを向いた。

自分は、キツきはごめんね、と小さい声で目を合わせて言う。凜に聞きたいことは、どうにも話せない。

凜は赤いバンダナを二重のコブにしてから、ゆっくり席を立ち上がった。そして、私がいる机の方に近づき、

「家来る、ますか?」

と言った。家という逃げられない環境に行くのは苦手だ。なのに、ううん、と脳内で言う言葉を準備しながら、

「行きたい」

と先に、口に出していた。

でも、訂正しようとは思わなかった。

「いや、あつついねー。今日の気温高すぎて、私もう溶けかけてるわ。ほぼこのアイス状態」
凜は、冷蔵庫から取り出したラムネ入りのアイスを、私の前に置きながら言った。

アイスの冷気が風に乗り、心のなかを換気している。その涼しさが心地よい。暑さで凝結したパッケージの水分も、夕陽に反射して綺麗で、頬につけたいほどだ。口にアイスを入れると、爽やかに優しく、ほろっとラムネは溶けた。

「やっぱ夏はアイス一択よね。ラムネがしゅわしゅわって、口の中で溶けるのさいこー。アイス美味しいよね？」

スプーンを口に入れたまま、窓の外でゆるゆると滲んでいく夕日を緊張気味に見つめている自分に、凜は何気なく話しかけている。窓の外を見続けていることに気づいているよ
うで、私の視線を追い、凜も同じように見て、会話が止まった。

スプーンから伝わって、指に絡まる溶けたアイスで正気に戻される。そして不自然に、「あー、あ、アイスいいね！ しゅわしゅわがね、また。うん、いい」と言った。凜の言ったことを繰り返して言葉にしたのは失礼だったが、凜は目を丸くしたあと、それね、と気づかないフリしてくれている。私が求める距離感に合わせようとしてくれるのが、余計に申し訳無い。

「こんなにも自分が悩まされている感じを出してしまっているのに、凜は何も聞いてこない。多分察しのいい彼女だから、自分の感情が今、どうなのか、知っているだろう。自分が話さないから、凜は話さないようにしようとしてくれる。」

外のセミの声さえ、聞こえない。ただこの空間に強調される、凜の優しさ。この空気感が安心する。久しぶりだな、こんなほっとしたのは。なんか、急に鼻の奥がツンと痛む。頬に何かが滴った。

「え、大丈夫ー？ ラムネ嫌い？ バニラにしとくべきだった？ ごめん」

これは気づかないフリにできないのか、凜は心配してくれた。むしろこっちが、ごめんなのに。

心許せる相手なんだ、凜は。

アイスを一つ食べるこの短い数分に、そう感じた。

今まで、おばあちゃんの話をしたところで、何かが変わるわけないって思っていた。ずっと、家族なんだから支えるのは当たり前と思って、いつからかおばあちゃんの生活に気を配り始めた。お尻拭いて、シーツ替えて、体を洗う、その繰り返し。

今日は疲れたから休もうと思うと、昨日まで続けてきたんだから、今日できないわけではない、って。気づいたら手が動いている。自分にとって、自分で選んだ暮らしだから。だから、誰かに相談、という言葉は出てこなかった。励ましも解決も、自分の努力と人生を否定されるようで、全て嫌味に聞こえてしまうから。肯定されたところで、何になるのって。大変だねとか、そう言われることを想像すると、歯を強く噛み締めてしまう。

経験ないでしょ、って

言いたくなる。

でも、今日初めて、誰かに頼ろう、と思った。凜になら、凜だから。安心が私の背中を押した。だから。

話したい。

凜の部屋で、無言の空間が流れていたこの時間。そこから、体育座りしていた手を結び直した。ふう、とお腹なかから息を吐き、目線の先をぎこちないが、凜の目に合わせる。

凜はこの視線に気づいたからか、あぐらから正座に足を組み替えて、気持ち、私の方へにじり寄ってきた。

重く聞かないでほしいんだけどさ

そこから話を始めた。

「おばあちゃんがいてね、大好きなんだ。だけど、トイレとか一人でいけなく…て」

口に出した。天を仰ぎながら。

何かが自分を詰まらせる。感情を表に出すと、その痛みから、思った以上に心が繊細なことに気づく。

凜の眼鏡は遠視用だから、こちらを見る目は、大きく見える。しかも、凜の私へと向くまなごしは、瞳の奥にある凜の強さが見えてきそうなのに、大きくたくましい。けど、だから、どんとと視界が歪む。天井の木目が渦を巻く。

学校で少し寝てしまったり、ザ・青春を遠巻きに眺めていたり、早く帰る私が、日常にいる。だから、そんなに話せていない私の言葉に加えるように、凜は、

「おばあちゃんの介護してることかな」

そう言った。

そして私は、しゃくり上がり、かすれるような声で、うん、と言った。

とうとう天を仰ぐ意味もなくなり、床の板目に目をやる。夏だから服に袖がなく、目から流れるそれを吸収するものがない。うくうくと自然に出てくる。手の甲に落ちるそれは、時計の秒針と重なっていく。思いを口に出すのは簡単ではないんだな。言葉を出そうとしても、嗚咽おえっしてしまって、うまくいかない。でも、伝えたい気持ちが胸から消えない。

「何があったか言える?」

凜は言った。

なんと言えよ、この気持ちを自分の中で納得したものにできるだろうか。

「やっほ」

咄嗟はじりに出てきた言葉だった。

何に対して言ったのか分からない。おばあちゃんの手助けをすること、それに悩む自身、周りの環境、なのか。

凜は頷き、そっか、そっか、と私の背中を撫なでた。

「言ってもらわなくても分かってたけどね。つらい時はね。口に出すと良いいところもあるよ。つらそーなんだよね、ずっと」

私、やっぱりつらかったのかな。

見てくれたんだ、私のこと。

待つてくれてたんだ、つらいと言える私のことを。

目を潤ませた私に

「友達じゃん」

と凜は声を強く張る。

凜は見てた、私を。私が涙を流す、ずっと前から。

凜は、でもこちらをじっとは見ずに、私の背中を撫で続けてくれた。

それは、揺れ動く心の波を、静かな優しきでなだめてくれるような安心だった。凜の所作は、到底私が追いつけそうにないくらい、しっかりしている。強さがある。そんなふうになりたい。憧れとかではなくて。肩を並べて感情をぶつけたり、ぶつけられたらいいな。遠くない、いつか。

私には凜がいる。凜になら苦しいという「形」が見られてもいい。

「こうやってまたアイス食べてもいい？ 美味しかったから、一緒に」

分かりづらい、友達になろう宣言をした。鼻水を啜るわ、喉はがらがらの状態で。

しかも、鼻だけでなく頬まで赤くなりかけている。でも、それは多分、この夕日のせいだ。

凜は視線を私に合わせ、

「えー、やだー、バ・ニ・ラは」

最後の一字を言うときに、凜は変に口角あげていた。ニヤツと言っているかのようにはつきりと。そして、凜のエクボに夕日があたり、眩しいほどに照っている。

「ラムネに一票！」

凜は高く腕を上げ、人差し指をビシツと天井に突き上げた。

直後に私は、笑いを堪えきれなくなってお腹を抑えた。じゅくじゅくした鈍い痛みが一気に吹き飛ぶような凜の元気が、絆創膏ばんそうこうになっている。凜に笑顔を伝えると、それを見た凜もつられるように笑う。

お腹痛いよー、ラムネえー。

ラムネは関係ないでしょー？

まだ涙のせいで喉の痛みは残っていて、再び涙が出てきた。でもこれはぎゅつきとは違う涙。なんだか、心が落ち着いたような、幸せのしよっぱぎ。

本気で久しぶりに泣いて笑った私。

そして距離が縮まった私たち。

世の中ではその関係に名前がついている。「友達」というらしい。素敵な言葉だ。

幸せな瞬間は、私から遠いものだと思っていた。でも、すぐ近くにある、今日のような出来事ひとつから生まれていくものなのかもしれない。今日、それを実感した。

私、今、幸せなんだ。

その刹那、おばあちゃんのことがおふわりと、浮かんできた。しわくちやで弱いけど、温かく握ってくれるあの手。大事なあの手は、私の幸せの瞬間を紡いだものだって、気づいた。

「もう一個、アイス食べる？」

凜は私の答えを知っているかのように、問いかけてくる。結構勘がいいんだね、と言うと、何が？ と誤魔化し、口角を上げている。

凜は本当に大好きな友達だ。

「外少し暗かったらさ、気をつけてね」

そう言う凜に、ありがとう、と返す。凜は頷き、顔元で小さく手を振った。

空はまだ思ってたよりも明るい。

雲の隙間からのぞく月が美しく、自然と上を向く。

帰ったら、おばあちゃんになんて伝えよう。友達ができたこと、アイスがいつもより美味しかったこと…

思い出すと笑顔がまた溢れる。

楽しかったなー、全部大切な時間だ。

いろんな話を、いろんな思いを、おばあちゃんに伝えたい。

つらいも悲しいも、つられて人生全部が落ち込むわけじゃない。一つの人生、悲しい感情だけじゃもったいない。たまには誰かに頼ってもいいんだ。凜は私を幸せにした。目の前にいる、その存在は大きい。

家に帰り、扉をガラガラと開ける。

玄関を開けると、廊下の先にあるリビングで、夏みかんをむいているおばあちゃんがいた。

「おかえり」

手に持っていた夏みかんの房を、皮の上にわざわざのせて、手を振るおばあちゃん。

「今日も暑かったじゃんね。食べるけ？」

しわくちなな手のひらにのせて差し出してくれる。

とりあえず今は、むいてくれたちよっと生温かい夏みかんと一緒に食べよう。

どんな味がするんだろう。

甘ったるいのが良いとは限らない。少し苦くても、私にとっては好みかもしれない。

たぶん、っていう予想だけだ。

空になったみかんの皮をたたんだら、凧のように変に口角があがって、自然に声が出た。

「また、おばあちゃんと一緒に食べたい」って。

今はそれで十分だ。

明日、凧に教えてあげよう、冷たいアイスと生温かい夏みかんは最高だと。